



2024 年

3 月 第 4・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 3 月 2 4 日 ヨハネ福音書 19 : 5 - 11 .

『 この世の判決 』 (棕櫚の主日)

・ 3 月 3 1 日 ルカ福音書 24 : 33 - 43 .

(ヨハネ福音書 18-20 章参照)

『 正義と真理と 』 (復活祭)

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

ピラトはローマの兵士たちが為すが儘に、変装させたイエスを外に連れ出し、祭司長や下役たちの前で言い放ちます。

あなたがたが引き取って、十字架につけるがよい。私（ピラト）はこの男には罪を見いだせない。（ヨハネ福音書 19：6c）

最終判決を下す権限は、ローマ総督のポンティオ・ピラトにあります。事前に大祭司の裁量に任せたところ、イエスの言動に“流神（神に対する冒瀆）”の嫌疑ありとの判断が下されましたが、当時のユダヤ人には死刑判決を下す権限はなく、未決囚のままにイエスは（最高法院から？）ローマ総督ポンティオ・ピラトの総督官邸に連行されました。

しかし、そこでも罪状認否が成立しません。自称“神の子”ならばユダヤの律法に反し、自称“王”だといえ、ローマ皇帝に対する背信となるなどという群衆の訴えは、いずれも審理を経ずに死刑判決を下す理由とはなりません。イエスがこの世のユダヤの王ではないことは、分かり切ったことでしたが、イエスが神の子であるのかないのかという判断は、ピラトには下しようがありません。イエスに、神の子としての出自を問うても梨のつぶてでした。

この世はイエス・キリストに判決を下す知的能力が欠如しており、その罪状は不明のまま、成り行きに任されます。

さらに今度は、裁判をする代わりに、複数の罪人の中から恩赦に値する者を一人選定するという過越祭の仕来りが浮上します。イエスに罪を見出せないピラトはこれを最後の手段として用いて、ユダヤ人の良識ある（イエスの恩赦という）決断を引き出そうと躍起になります。けれども彼らの選択は無実のイエスではなく、隣にいた強盗犯のバラバの方をその対象と見做したのです。たしかに、バラバになれば、人の恩を着せることで改心させられると考える者も、その場にはいたかもしれません。

被告人イエスは十字架につけられ、彼の頭上には「ナザレ人イエス、ユダヤ人の王」とだけ身分（＝罪状？！）が表示されます。これが、イエス

に対する“この世の判決”です。しかし、これに納得する者は誰一人いないままに十字架刑は執行されたのでした。

《正義と真理と》

“あなたがたに平安があるように”と、復活のキリストは潜伏中の弟子たちの前に顕れます。彼らが平安のかけらもない生活を強いられていたことが、この言葉からうかがえます。

イエスの受難の前夜、大祭司の屋敷の中庭で焚火にあたっていた時に鶏が三度啼くのを聞いて泣いたペトロ、また仲間の弟子たちの行方はその後不明となります。直前には、主イエスに同行して殉教も辞さない息巻いたのはペトロでしたが、結果は全て主の予言通りで、その後は同行を回避せざるを得ず、他の弟子たちと共に、潜伏を余儀なくされたのです。

さて、葬られて三日目に、備えられた墓を出た復活のイエスが顕れたのは、付近に潜む弟子たちの隠れ家のただ中でした。これがもし放蕩息子の帰還だったなら、何はともあれ大歓迎の宴を開くところです。けれども主の姿を直視した弟子たちにはそれが出来ません。その手には釘跡が、その脇腹には槍で貫かれた刺し傷が、そのまま残っていたからです。その致死傷を今更手当する術もなければ、意義も不明です。彼らは言葉に詰まってしまいます。

一方、イエスの処刑は、この世の人間の（ユダヤとローマの）“正義”によって成し遂げられました。しかし、その成就にも、また自らの言動にも“正義”を見出せないまま、世界からとりのこされていたのがイエスの弟子たちでした。正義も不正義も、孤立する彼らをもうこれ以上追い詰めることはできません。

一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だ（ヨハネ福音書 18:14）。

“好都合”という訳語はともかく、そう発言したのは大祭司のカヤパでした。

言辞が本物で人口に膾炙していたのか否かはともかく、その“一人の人間”と同定されたのがイエスです。さらに、その“民”の定義にイエスの弟子たちの存在も含まれるのだとすると、彼らにとっても主イエスの死は“好都合(?)”だったのでしょうか。また、潜伏期間中の彼らが、そのことを問題視し、議論することはあったのでしょうか。

カヤパのものとされる言辞は、イザヤ書の“苦難の僕の濫用(?!)”ともとれる、時代を超えてユダヤ人の脳裏に去来していたかもしれぬ打算的な解決策です。しかし、イエスの死によって、この後のユダヤ戦争(紀元66年～)やローマによるユダヤの人の大虐殺を回避できた形跡は見当たりません。1世紀末、世に出始めたと考えられるヨハネ福音書とその読者が、すでにユダヤ戦争の悲惨さを見聞きしていたのだとすると、カヤパの限定的な歴史認識が見当違いであったことは明らかでした。

人間の果たしうる“正義”の実現は、神の子の殺害をもって「成し遂げられた」ことがイエス・キリストご自身の、十字架上の最後の言葉として、示されたことがヨハネ福音書の19章の30節に記されています。

そして、人間の誤った正義は、やがてキリストの復活という神の“真理”によって打ち負かされることになったのです。